

この本と私

読むことで、気付くこと
書くことで、判ることがある

「小さな一歩から」

三浦綾子著

三浦綾子は北海道出身の作家です。敬虔なクリスチャンで、70冊に及ぶ著書の多くは、根底でキリストの愛をテーマにしています。生来身体が弱かった著者は、小学校教員と旭川で雑貨商を営んでいた時以外は、肺結核、脊椎カリエス、心臓病、帯状疱疹、直腸ガン、パーキンソン病などを患っていました。執筆活動は常に病と共にあったのです。こんな状態でも作家活動を続けられたのは伴侶の三浦光世の存在があったからと、作品の中で度々触れています。たとえば、代表作の「母」。この作品は「蟹工船」の著者であり、警察での拷問が元で亡くなった小林多喜二の母について書かれたもの。綾子は多喜二の母をテーマに書くことについて気が進まなかったのですが、光世の熱心な勧めによって筆を取ることを決めたそうです。

光世は創作活動の支えにもなりました。光世は公務の傍ら、身体不自由な綾子の介護をし、口述筆記も務めています。まさに一心同体の結晶の作品群と言っていいでしょう。綾子はそのいきさつを数々のエッセイで書いており、私は夫婦愛の美しさを感じました。本書のタイトルでもある「小さな一歩」では、味覚と臭覚を失った知人の女性について書いています。彼女は、食べることに不満を感じるどころか、味覚を楽しんでいる友人達に、おいしいものを提供していました。綾子はガンになってから甘いものを遠ざけていましたが、彼女の作る紫蘇ジュースの味に感動します。その女性は何かを失っても人を喜ばす術を見いだしたのです。そのほかエッセイにも、病弱だからこそ見える感動の場面があり、心を打ちます。

講談社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞